菜の花の西広板羽目堰
桜の諏訪神社を巡る

いちはら市民大学卒業生
「ｉ−見たい・知りたい・伝え隊」活動報告

2019. 3. 26

この会は市原市市民大学卒業生による会員相互の交流を図り研鑽に努め、「歴史・観光」を通じて、生きがいを求めると共に、市原市市民大学で習得した知識を地域社会に活用することを目的として活動しています。

平成 30 年度は 3 班にグループ分けし、市内の歴史・観光についてテーマを設定し、現地調査・文献集めをし、現地で観光ガイドの研修を行いました。

今回、第 3 班が担当した「地元を知ろう！　菜の花の西広板羽目堰と桜の諏訪神社を巡る」の研修内容について報告します。

尚、第 1 班は「玉叡山西願寺阿弥陀堂附厨子、麒麟山鳳来寺観音堂及び観音堂ご詠歌についてのガイド」、第 2 班は「幻の鶴舞藩」を担当しました。

第 3 班メンバー

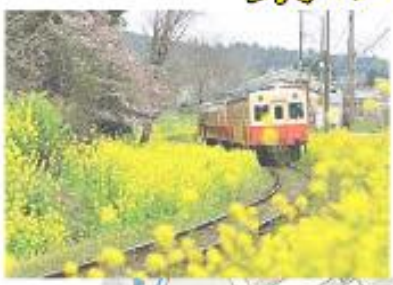
佐々木みね子
熊木光治
石黒修一
湊　良巍

2019/ 3/26

i -見たい・知りたい・伝え隊　3班発表

地元を知ろう！

菜の花の西広板羽目堰
桜の諏訪神社を巡る



今日のコース

9:10	10:30		10:50	11:40		12:00
板羽目堰	==	上下諏訪神社			==	板羽目堰

1.　観光ガイド研修のコンセプト

・誰をガイド：**一般の方々に**
観光ガイドであるので、歴史背景などの難しいことは簡単に触れる程度として、なぜここにあるのか、どのようなものなのか　など初歩的な一般の方が分かり易い説明とする。

・現地をガイド：**実際に歩いて見ていただく**
現地を歩き、現物をみながらの説明・配布資料も簡素に見やすくする。

・何をガイド　：**地元を知って頂く**
意外と地元のことが地元の方々に知られていないので、「地元のことを発信して地元をもっと知って貰い、地元を見直してもらう

「**一般の方々に実際に歩いて見て地元をより知って頂けるがイド**」を目指す。

2.　進め方

・ガイド場所の選定：メンバーの地元を選ぶ
・現地下見・学習：全員で現地の下見、関係者の皆様から学習
・ガイドポイントの設定：ガイドコース・ポイント・説明者の決定
・配布資料・ガイド原稿の作成：ガイドに合わせた配布資料の作成
・実施年月日：2019 年３月 26 日

3. 実　績

(1) ガイド場所の設定：西広地区

３班メンバーの居住する西広をターゲットとし、景観コンテスト大臣賞受賞の「西広板羽目堰」と西広地区を見おろす「前廣」と書いて「さいひろ」と読ませる「西広神社」とした。

（2）現地下見・学習：「西広神社」を「上下諏訪神社」に決定

数回の現地下見を行い、その結果、堰と西広神社の距離が長いため堰に近い「上下諏訪神社」に変更した。文献での調査のほか、五井連合土地改良区の方々から板羽目堰保存館・堰開放のビデオを見学させて頂き、地元の郷土史家の山越国臣様から西広の歴史等の説明を頂き、「上下諏訪神社」の総代、管轄の大宮神社から多くのご教示いただきました。養老川の主要な物資輸送であった「川船」も取り上げることにした。

(3) ガイドポイントの設定：西広板羽目堰保存館をベースに

当日は、あずの里で集合し、そろって保存館駐車場へ、保存館から上下諏訪神社への道順、安全確認・ガイドポイントの設定、当日は雨天のため保存館でのガイドのみとし上下諏訪神社へは行かないことを決定した。

ガイドポイントでの説明者の割り振りを決定。

(4) 配布資料：歩きながら使えるよう簡素な資料

配布資料は歩きながら見やすく分かりやすくするため簡素なものとした。

また、板羽目堰の模型を作成、「上下諏訪神社境内ガイド図」をつくりより分かりやすいガイドを目指した。

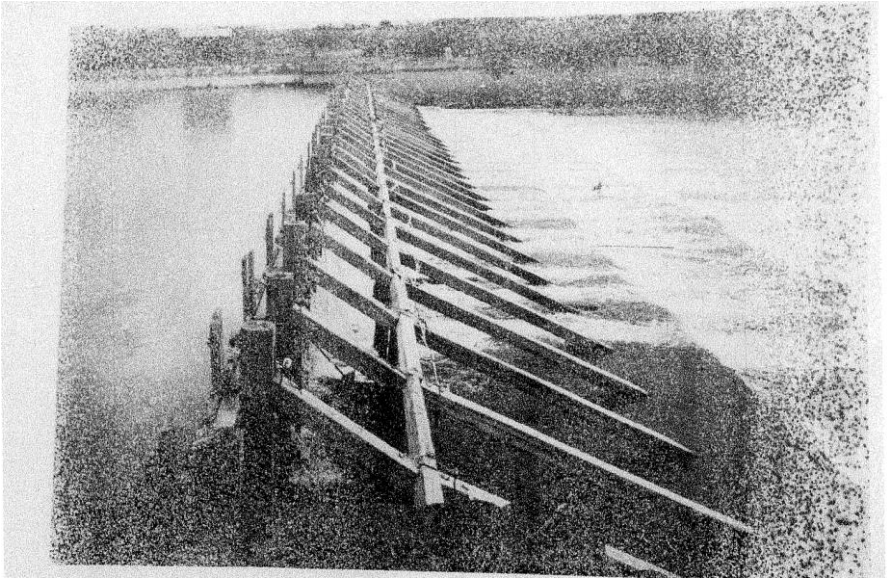
(5) 研修当日：雨天のため保存館のみ

研修当日あいにくの雨天となったため保存館のみでのガイドとなった。このため五井連合土地改良区の皆様からの説明による保存館内案内をいただいた。

4. 学習まとめ

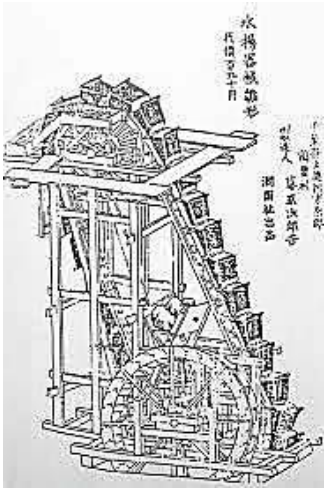
(1) 西広板羽目堰

1）概要



・板羽目堰は、明治から大正にかけて養老川下流に普及
・角材を支柱にして厚い板を羽目板にした木製の堰　　解説：
西広にある灌漑・治水を的とした木材製のダム　養老川の流れを板で堰き止め水位を上げ田圃へ水を送るとともに、洪水時には堰き止めていた板を倒すことにより水を放出し、堰の破壊を防ぐ仕組み。

・構造的な発想、機能、規模は、我が国の農業水利史上、他に例のみない施設
・昭和 54 年に市原市の有形民俗文化財に指定・平成 6 年美しい日本の村景観コンテストで農林水産大臣賞を受賞（「景観大賞」という）



解説：養老川は全域に於いて灌漑に利用されているが、上中流域では川がU字にえぐられており農地より低い流れとなっているので「藤原式揚水機（左図）」等で汲み上げて田をうるおしている。下流域では流れが農地と同じ高さとなりますので川を堰き止め水位を上げることで田に水を引く堰が作られた。一方、下流域では上流域での大雨等で洪水が度々起きていた。「養老川は暴れ川」と言われ由縁である。この洪水から堰の破壊を防ぐため堰を自ら倒し、短時間で再構築する堰が考案された。下流域での堰は上流から西広、廿五里、飯沼、中瀬、出津、吹上の六ケ所に作られたが、最後まで残ったのが西広なのである。

この西広板羽目堰は昭和 54 年に市の指定有形文化財、平成 6 年に農水省主催「日本のむら景観コンテスト・文化部門・農林水産大臣賞」に選定されました。

2）現況

・現地は西広地区、諏訪神社から西の方向 300 メーター近くの養老川に位置し、川面にはコンクリートの施設跡がうかがえる。
・また、当時使用した角材の保管倉庫が建っています。

3）堰の歴史的背景

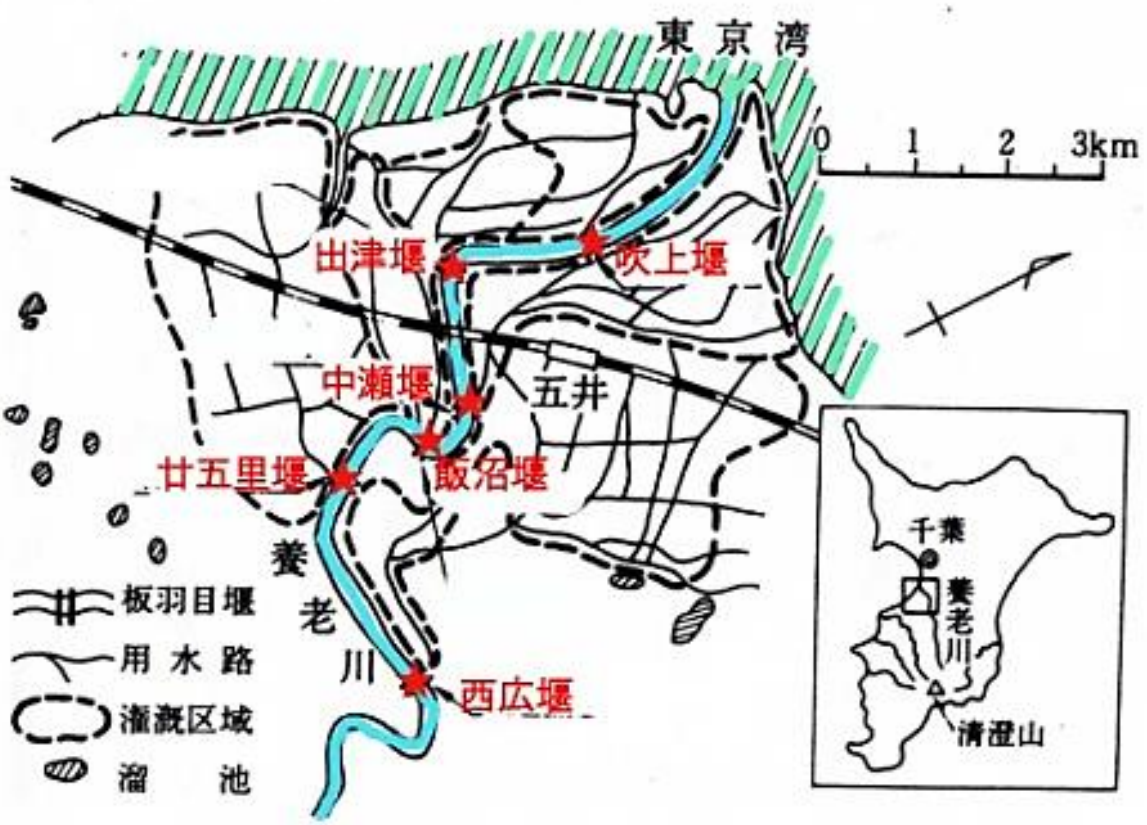


図-1　養老川の板羽目堰分布図[2)]

・堰は、養老川に6ケ所(吹上、出津、中瀬、飯沼、廿五里（ついへいじ）、西広）に存在

・宝暦9年(1760年)頃は土俵堰で取水し、沿岸部の新田に用水を供給することになった。規模は、上幅1.8m、敷幅8.2m、高さ2.5m、堰幅65m、空俵9,080俵、綱縄3、026捉、土量700㎥、松杭60本、土台木180本、そだ（粗朶）200束であり、労働力はおよそ延べ1,260名を要した。

（土地改良区の資料、伝統的技術の再発見　佐藤俊郎著）

・この土俵堰は洪水のたびに流出し農民の大きい負担になっていた。

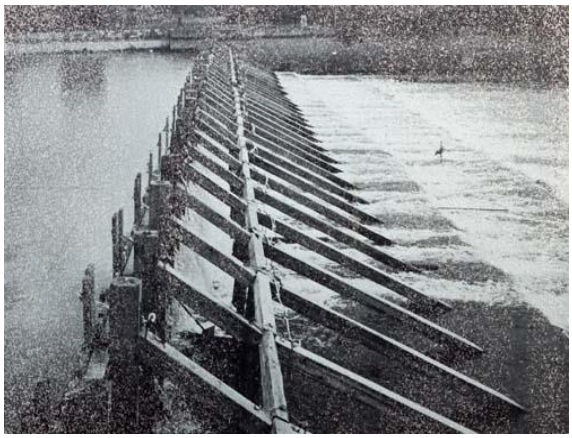
・洪水時に土俵堰の流出を防ぐため、堰本体にかかる圧力を減じさせるようと堰の上流部左岸の堤防の一部をわざと脆弱な構造とし、ここから洪水流を流し込み、堰の下流で本流に戻す迂回水路（空川：そらかわ）をもうけた。

4）渡辺善右衛門

・明治１４年、夷隅郡山田村（現在の大原町）の渡辺善右衛門が自費で改良にとりかかり、明治18年、両岸側は従来の土俵積みで中央部14.5間（26m）に羽目板を設けたもの。洪水時は上段の板を間引いて洪水を下流に流し堰の破壊を防ぐもので、板羽目の技術が確立した。

・洪水時、堰本体の保全ばかりでなく、沿岸への溢水を防ぐため旧来の回水路を整備した。

5）板羽目堰の形状



・川幅 63mに対して堰幅 61m、堰長 13m、堰高 2.3m
・部材は、左岸側に 16 組、右岸側に 17 組合計 33 組で構成
・部材は 6 部材で構成
親柱、胴木、帆立、頭、張、控
・垂直に対して下流側に 2.5°傾斜し、左右の残木をハンマーで壊すと中部が水圧により分かれて倒壊・残組は、回収、鎖、ロープでつながれている。

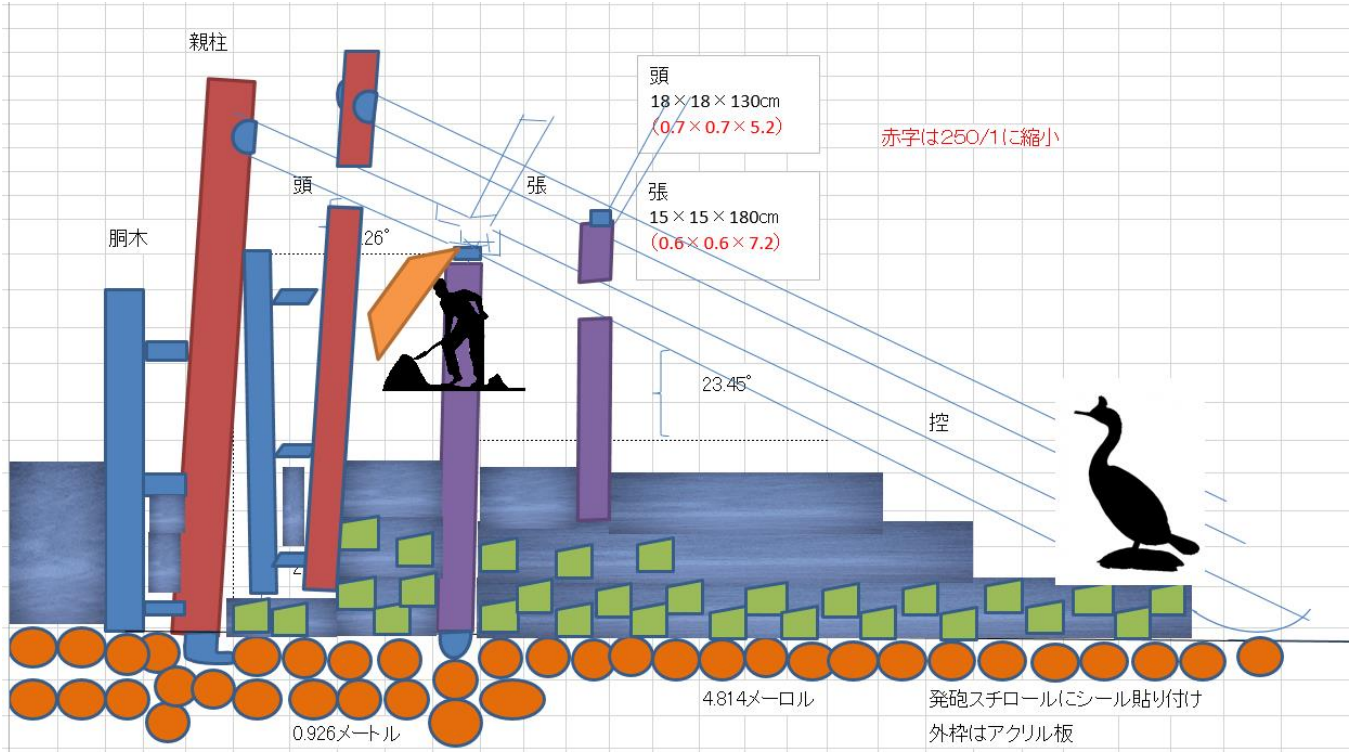
6）板羽目の改良（資料 1. 参照）

・県の桜井彦三が洪水対策機能を取り入れるべき改良
洪水対策
両端部の残木を外すことにより、堰の中央部から開放できるよう改良
・現在は昭和 54 年に鋼材ゲートが新設されたため、部材は倉庫に保菅し、伝統技術の保存に努めている。

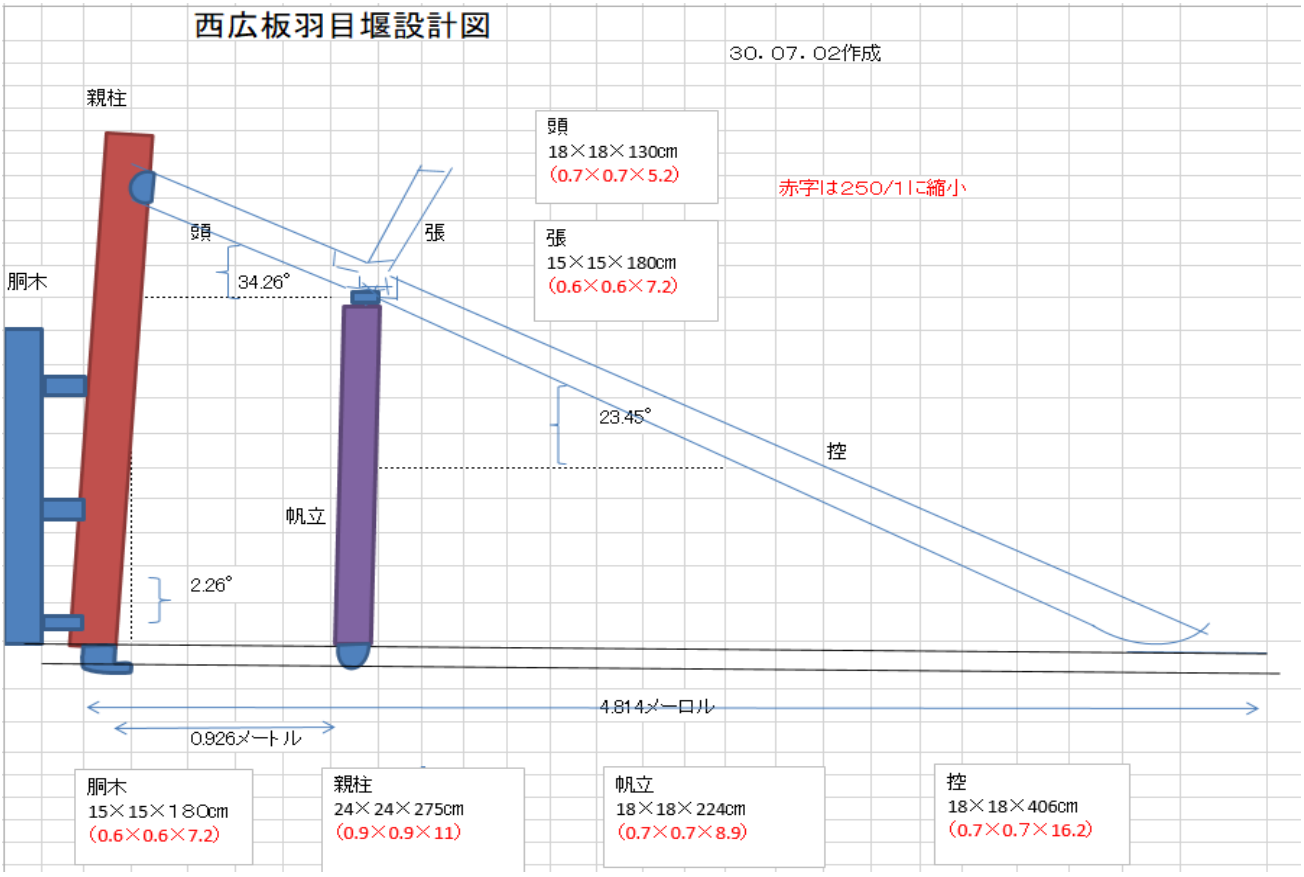
7）模型の製作

現地は、コンクリートの跡しかないため、どういうものか不明
今回、研究者の説明書を参考にしながら模型で再現することにした。

・ 概念図の作成



・ 設計図の作成

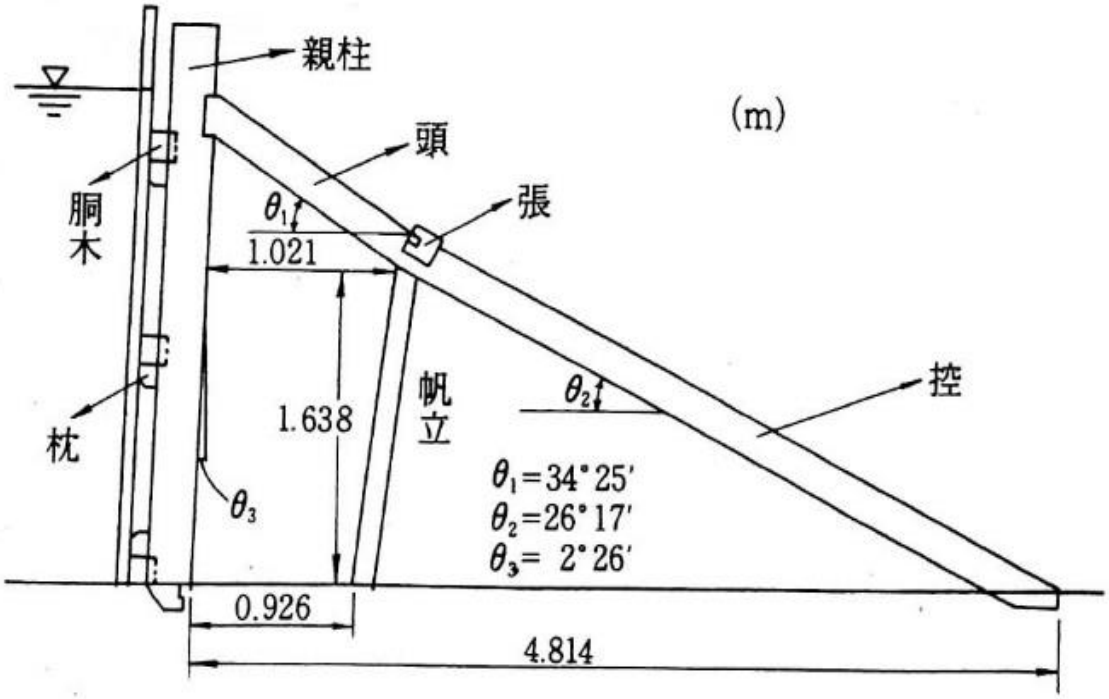


・ 特徴　廃材の使用等でコストミニマムにおさえた。

・ 完成平成 30 年 11 月
　模型は生涯学習センターに展示している

資料 1. 改良型板羽目堰

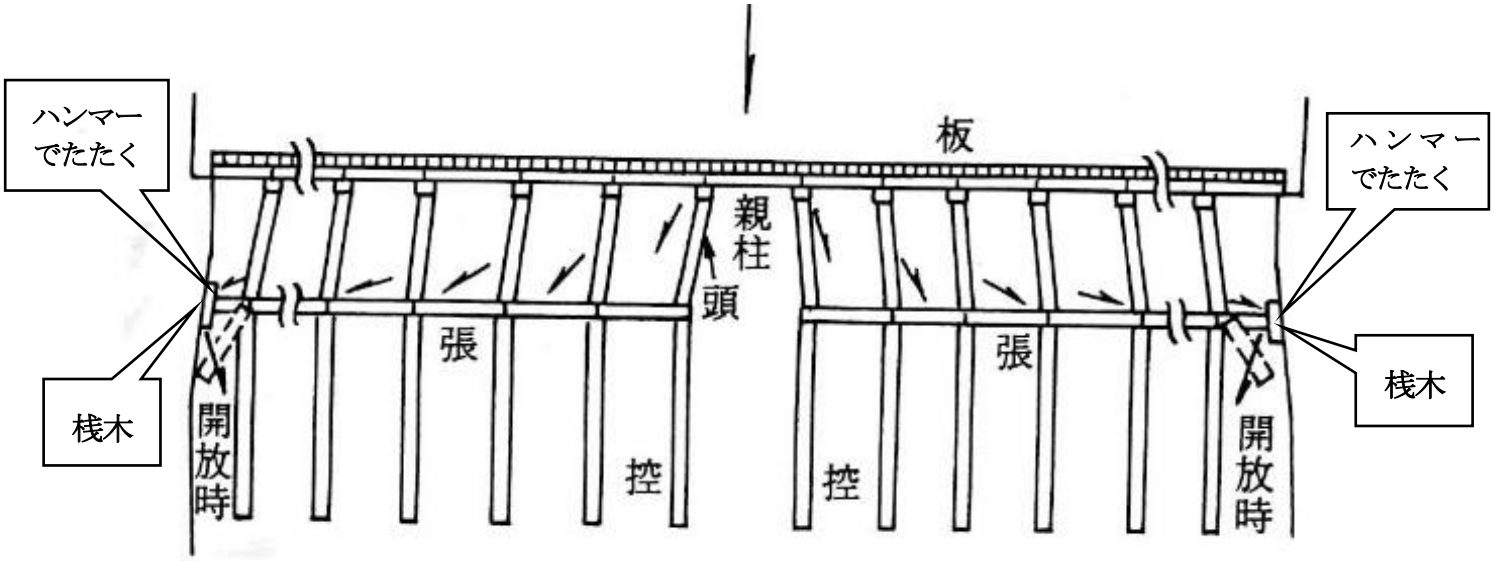
どうして一瞬で壊れるの（堰の構造）



堰高さ 2.3m、堰幅 61m親柱：下流側へ約 2.5° 傾く基礎部は鉤型の突起があり頭と控えには約 8° の角度の違い接合部にははめ込みの溝、張の受けの切り込みが設けられている。
帆立は下流側に 5° 傾く

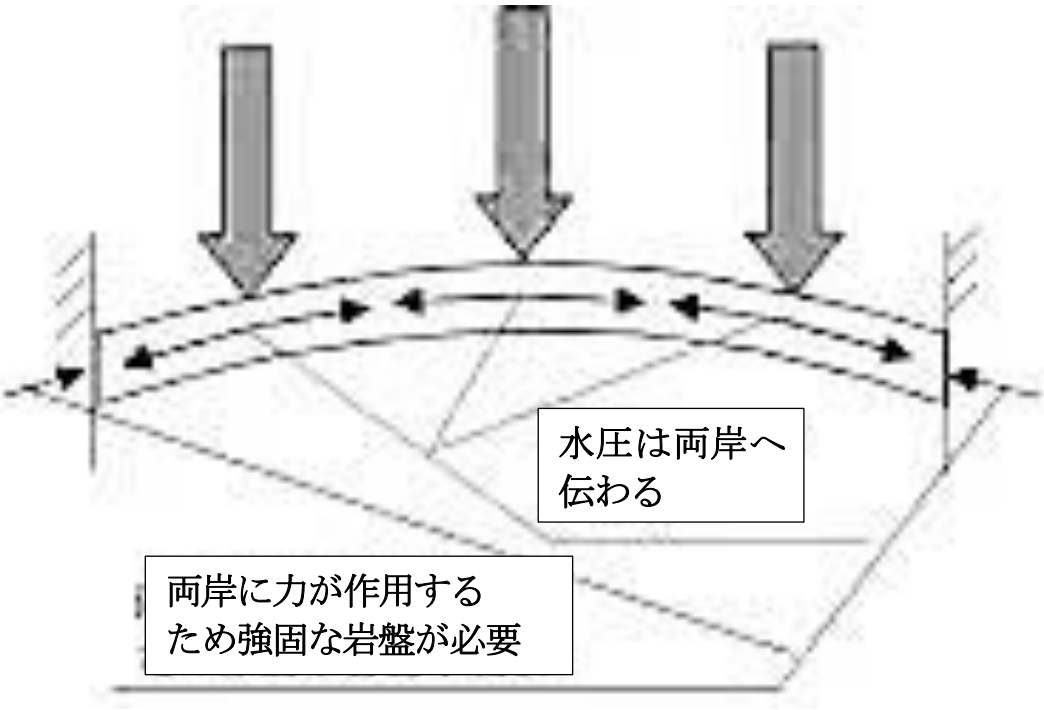
断面図（上から見た図）

水の流れ



頭が左右岸方向に 3.5° 傾斜頭・控・帆立の接点には左右岸方向に張が設けられ、左右の岸に接する張を桟木（さんぎ）と言う。

アーチダムの力の伝達



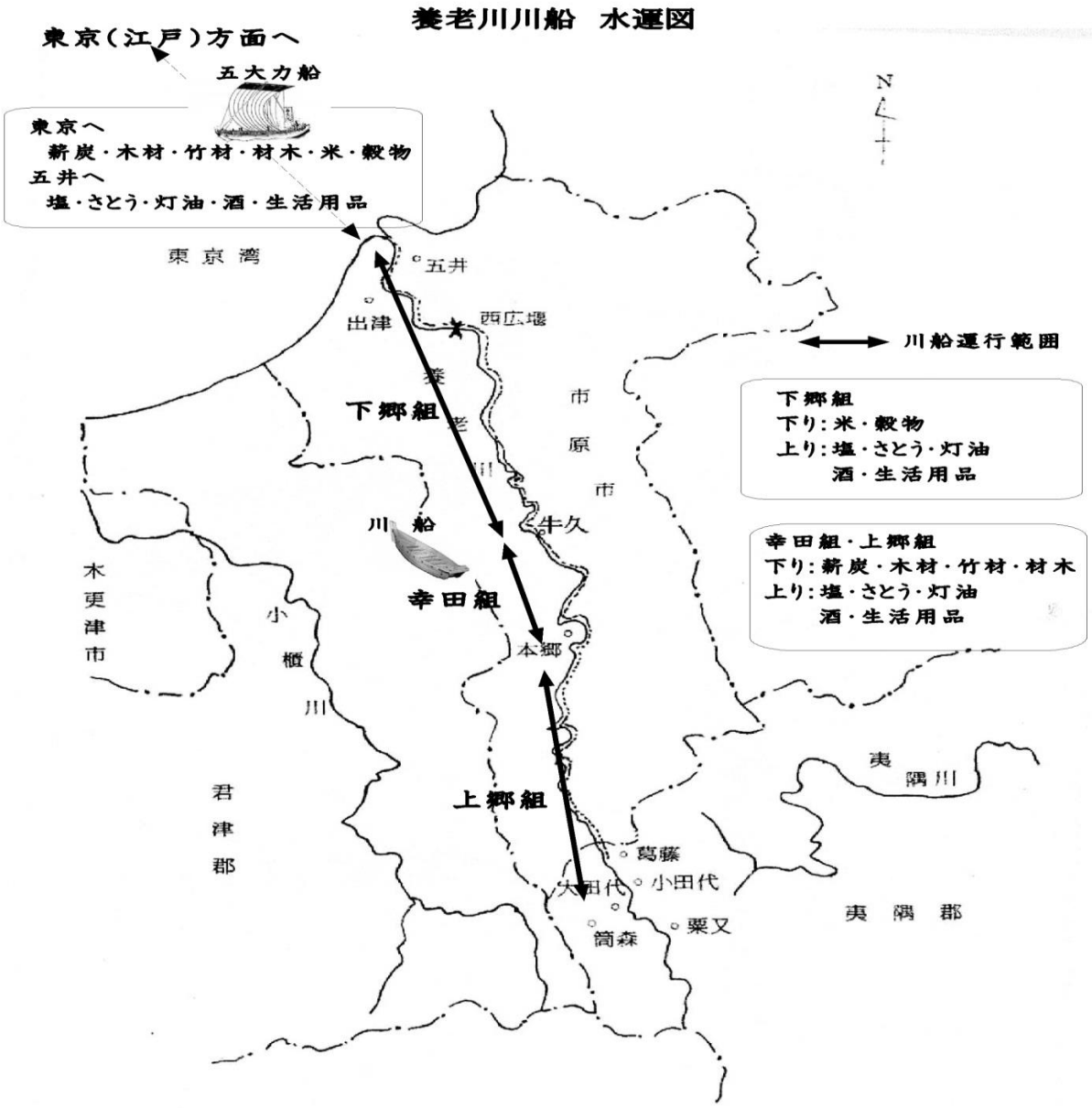
張りには左右岸方向に傾いた頭の左右岸方向の分力が掛かり、その合計が桟木にかかり、左右のコンクリート壁を押し付ける。これはアーチダムの力の伝達と同じです。
つまり、堰に掛かる圧力はすべて両岸の桟木に掛かり支えている訳です。
この桟木を外すことにより、支えがなくなり一瞬にして堰が崩壊するのです。

桟木をハンマーで外すと、
①張りが桟木方向へ移動して外れ、
②頭が親柱から外れ、
③親柱が支えを失い下流へ傾き倒れ、上板、下板が同時に倒れ
④帆立、控が抜ける。
⑤部材がながされる。
⑥ワイヤーでつながれた部材が岸沿いに流れ着く。

◇西広板羽目堰開放動画（youtube）
https://www.youtube.com/watch?v=jyfMyy7fvtM

(2) 養老川今昔（川船）　　遠山あき｛養老川雑記｝より

養老川上流・中流で伐り出す薪や炭などを五井河口まで送り、帰り船で生活必需品などを運び、流域の　人々の暮らしを支えた。



養老川中流より上方は、山地から伐り出す薪や炭は山村の人々にとっては重要な産物で、それによって生活が支えられていた。生産されたものは町で売るために五井河口まで川船で送り、そこで五大力船に積み替え、東京（江戸）方面へ送ら物を輸送するのに、炭の場合、人力なら２俵、馬の背なら五俵、馬車なら五十俵のところ川船なら四百俵積めた。水の加減がよければ養老渓谷から五井河口の河岸まで一日か一日下ることが出来た。
養老川の下流、中流、上流には川船を管理する組が作られていて、それぞれ五井

河口から牛久・佐是あたりまで下郷（しもごう）組、そこからさかのぼって高滝の本郷までを幸田組、その上流の小田代（こただい）までを上郷（かみごう）組といった。上郷の葛藤の集荷場が（養老渓谷の温泉街：岩風呂ホテル付近）が川船の上限で、ここまでは川船が行った。
上郷・幸田組の土地で生産された品物を地区内の河岸（かし）と呼ばれたいくつかの集荷場に集め、それを川船に荷積みしてくだった。　河岸までは牛馬の背や馬車で運んできた。
　幸田組より上流は主として薪炭・木材・竹材を積んでくだり、塩・さとう・灯油・酒・生活用品などを積んでのぼった。
下郷は生活必需品を積んでのぼり、帰り船に米や穀類・薪炭などを積んでかえった。
江戸末期から大正時代には七十隻ほどの川船があった。

川船の荷は河口にある仲買人の倉庫に運び込まれ、荷が集まると五大力船などに積み込んで、東京湾を越え、越中島などの問屋へおくられた。

五大力船は米なら千二百俵くらい積み、帆掛け船で五井から東京まで一日弱でついたそうである。河口の出津はほとんどの家が川船か五大力船の船頭を家業としていた。

川船の大きさは大体巾 5～7m、長さ 10～15m。
一艘で仕事をするものと、二艘（親船とトマ船）でするものがあった。　二艘の場合大きい方の親船に荷を積み、小型のトマ船は端の方に杉皮で屋根を造り、周りをトマで囲んだトマ小屋があった。この小屋に寝泊まりして川をのぼりくだりするのを生業とした船頭一家もいた。

＊トマ（苫：茅などの草を編んだ薄いむしろ）

川船が運行されるのは、秋の収穫が終わる十月から十一月初めにかけて通船を始め、翌年三月から四月頃までで終りとなる。この間二十回程度くだっていった。天候等に左右されるが、一回下ってまた帰って来るのに天候にも左右されるが大体七日ぐらいかかった。

川を上るときは五井河岸から佐是・川間あたりまでは平坦な場所を流れているので、風向きが好ければ（西風）帆を上げてのぼることもあったが（写真　帆の川船）、通常は竿を使って船をあやつり、また舳先（へさき：船の先端）に綱をつけ、土手を歩いて船を曳いた（曳きこという）。

年の暮れになると薪炭や正月用品の需要が増え、船は次から次へとくだってくる。
そんな時は十艘も十五艘もつないでのぼることがあった。
船を曳く者、船が浅瀬や岩場に乗り上げないようテコ棒をかけて、肩で持ち上げるものと手分けしてのぼった（写真）が大変な重労働であった。
川船が運行するのは冬場と決まっていたから、厳冬期ともなると岸には厚く氷が張りつめ、岩崖には長いツララが下がっている。流れる水にも氷片が浮いている。氷を踏み、水を蹴散らして船を上げる。お互いに大声で掛け声をかけてのぼっていく。
氷をかき分けて船を曳くので、股引（ももひき）は十日もするとスネの部分が擦り切れてしまうので、継ぎを何枚も重ね刺子のように厚くし、その上にゴザ切れをまいて川にはいった。女でも川に入って船を曳くので、船頭の女房はつらいと言われた。
しかし、船に乗ればくだりの荷の運賃と帰りの荷も手間賃が入り非常に良い収

入にはなった。その代わり身を削る重労働でもあった。
　小湊鉄道が大正末期に月崎まで、昭和三年にさらに伸びて中野まで開通するまで生産物のほとんどが川船で輸送されていたが、鉄道の開通によりだんだん鉄道輸送に切り替わり、さらに道路が整備されトラック輸送が一般的となり、昭和の初めに川船は姿を消した。

◇養老川舟唄

1. 養老川こそ　宝のかわよ
　船頭働けよ　養老川で
　船頭起きろよ　はやよが明けた
　起きなきゃ　出船がおそくなる

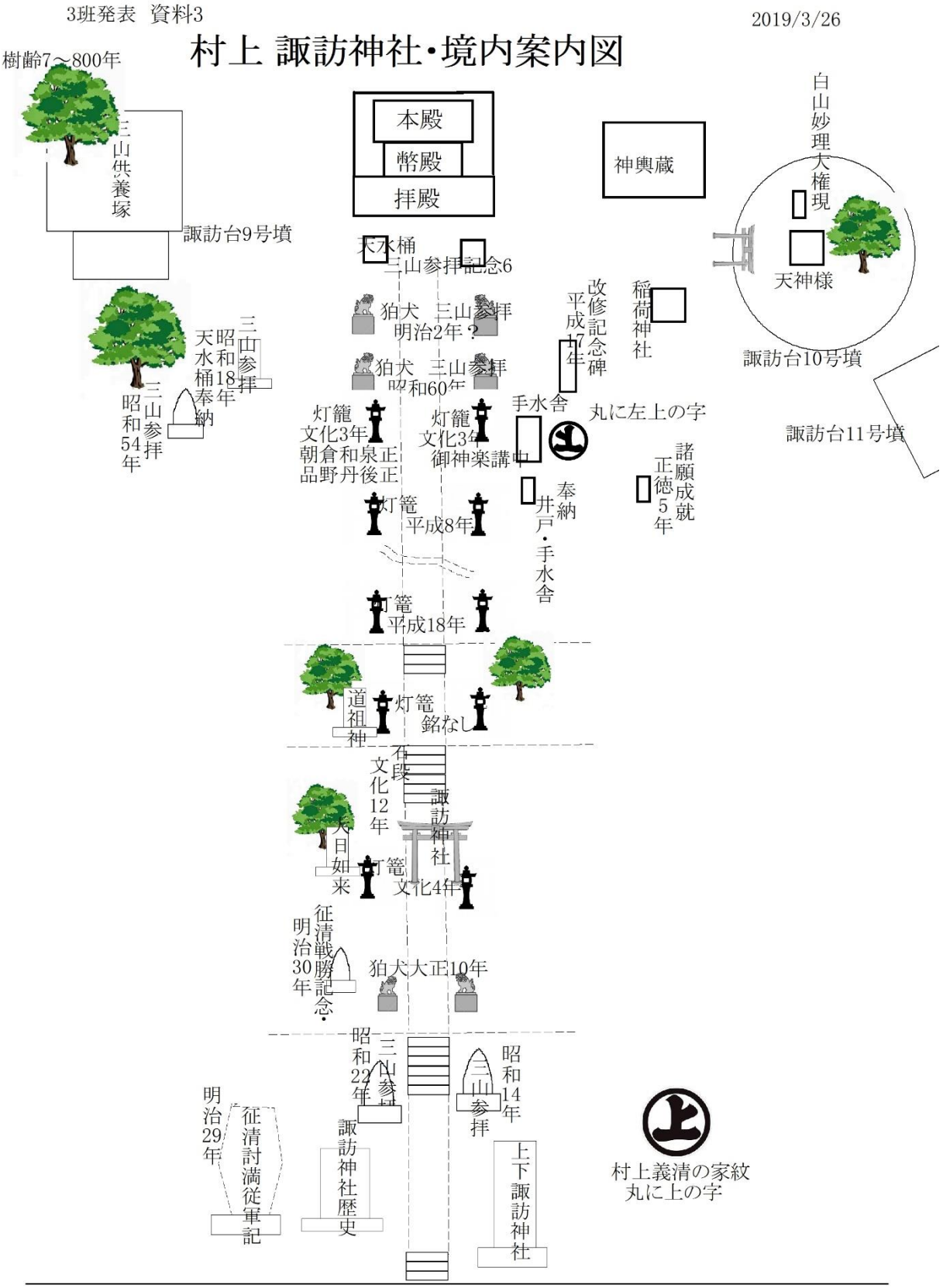
2. 三十五反の帆を　かきあげて
　川上めがけてよ　走り行く
　船は早よかろ　形もよかろ
　乗り子の船頭さんの腕の良さ

3. 船はチャンコロでも　炭薪ゃ積まぬ
　積んだ荷物はヨ米と酒
　積み荷終わればヨ船くだる
　くだりくだってヨ五井の河岸

疑問？？
川船が通るとき西広板羽目堰では、通す、通さないの問題が起きなかったのだろうか。

　昭和51年度・千葉県教育委員会発行の「養老川西広板羽目堰についての調査研究」によると明治40年に県知事から西広堰管理者に河川管理について命令書が出ており、その中で、「舟筏に対しては灌漑に支障ない限りは堰を開放通行させること。舟筏通行に対しては如何なる名義のであっても金または物品を取ってはならない」としている。
しかし現実は、西広堰の堰き止め期間は4月から8月であり、川舟運行は9月から3月頃迄であったので支障はなかったようである。

3.　上下諏訪神社（村上）


3班発表　資料3
2019/3/26
村上 諏訪神社・境内案内図
樹齢7～800年
三山供養塚
諏訪台9号墳
本殿
幣殿
拝殿
神輿蔵
白山妙理大権現
天神様
諏訪台10号墳
諏訪台11号墳
天水桶
三山参拝記念6
狛犬　三山参拝
明治2年？
狛犬　三山参拝
昭和60年
改修記念碑
平成17年
稲荷神社
三山参拝
昭和18年
天水桶奉納
三山参拝
昭和54年
灯籠
文化3年
朝倉和泉正
品野丹後正
灯籠
文化3年
御神楽講中
手水舎
丸に左上の字
諸願成就
正徳5年
奉納
井戸・手水舎
灯篭
平成8年
灯篭
平成18年
道祖神
灯篭
銘なし
石段
文化12年
諏訪神社
大日如来
灯篭
文化4年
征清戦勝記念・
明治30年
狛犬大正10年
昭和22年
三山参拝
昭和14年
三山参拝
明治29年
征清討満従軍記
諏訪神社歴史
上下諏訪神社
村上義清の家紋
丸に上の字

1）.入口

①上下諏訪神社の読み方

総本社の諏訪神社は諏訪湖を挟んで上社（かみしゃ）、下社（しもしゃ）がありますので、「かみ　しも」と読むばかりと思っていましたが、長野県上高井郡小布施町（かみたかいぐんおぶせまち）に「上下諏訪神社」とかいて「じょうげすわじんじゃ」と読ませる神社がありましたので管理神社の大宮神社に確認した所やはり「かみしも」でした。

2）諏訪神社歴史

①　碑文紹介（由緒）

ア　戦国時代信濃を納めていた武将・村上義清は甲斐・武田信玄に敗れ越後に落ち延びて上杉謙信の配下となったが信玄と謙信が和睦したため、上総市原郡へ移り居城を構えた。これにより此の地を村上と呼ぶようになった。

義清は本国の諏訪大明神をこの地に勧請したのがこの神社。

宮司も諏訪から呼び寄せ、「品野（しなの）」姓とした。

注：村上義清は村上源氏の一族で、瀬戸内海で活動した村上水軍とは同族。家紋は同じ丸に上の字。

イ　ご祭神

ア）健御名方神（たけみなかたのかみ）

天孫降臨に先たち、建御雷神（たけみかづちのかみ）が大国主神に国譲りを迫ったときに健御名方神は反対し、建御雷神に戦いを挑んだが負けて諏訪まで逃げた。（古事記）

諏訪地方の土着の神々を鎮め、上社を司った（諏訪地方の神話）

イ）八坂刀倍神（やさかとめのかみ）　健御名方神のお妃

②解説

ア　素戔嗚尊（すさのうおのみこと：日本書記）　天照大御神の弟、高天原を追放され出雲の国へ、ヤマタノオロチ退治等の神話の主

古事記では速須佐之男命

イ　大己貴尊（おおむなちのみこと：日本書記）　多くの神話がある

古事記では大国主神（おおくにぬしのかみ）他多数

出雲風土記では国土創造の神、出雲大社の御祭神

ウ　健御名方神（たけみなかたのかみ）

天孫降臨に先たち、建御雷神（たけみかづちのかみ）が大国主神に国

譲りを迫ったときに健御名方神は反対し、建御雷神に戦いを挑んだが負けて諏訪まで逃げた。（古事記）
諏訪地方の土着の神々を鎮め、上社を司った（諏訪地方の神話）

エ　村上義清の略歴、
戦国時代の武将。信濃埴科郡葛尾城主、当時信濃第一の勢力をほこる武田信玄の侵攻を2度にわたり防いだが、ついには信玄に敗れ、上杉謙信を頼って越後に落ち延びた。その後上杉家臣・越後根知城主（えちごねちじょうしゅ）として活躍するが、73歳で根知城で病死した・・・文書と異なる（碑文）

オ　村上源氏（むらかみげんじ）
村上義清は村上源氏の一族で、瀬戸内海で活動した村上水軍とは同族。家紋は同じ丸に上の字。

カ　碑文の「品野」に注目
諏訪神社下社神主（大祝）は科野（しなの）国造の末裔で金刺と名のった。品野氏は宮司として諏訪神社から呼寄せられていることから科野氏と血縁関係があるのではと推測される。

3）最初の階段両脇に三山参拝記念碑

①諏訪神社には参拝記念奉納品に満ち溢れている

②出羽三山信仰とは
『三山信仰』は山形県中央に聳える月山、羽黒山、湯殿山（これらを総称して出羽三山と言う）を行場として山伏集団の修験道を背景とする三山主導の信仰。

③供養塚
初めて三山を登拝した人はオヤマから剣梵天（腰梵天　ボッケン）をいただく。これは自分の身代わりであり分身である。この剣梵天を塚に埋葬することで、出羽三山の神と一体となり、自分のムラや子孫を守るという。埋葬する塚を供養塚という。
埋葬する一連の行事を梵天供養という。梵天供養は自分自身の生きながらの葬儀ともいわれる。

4）文化年号の奉納品が多い理由

①江戸時代後期の文化文政時代（1804年−1830年）は江戸期の町人文化の全盛期にあたり、国学や蘭学の大成した時期でもある。史学上は、江戸前期に上方を中心に起こった町人文化である元禄文化と対比され、享楽的色彩が強いとする：化政文化（かせいぶんか）

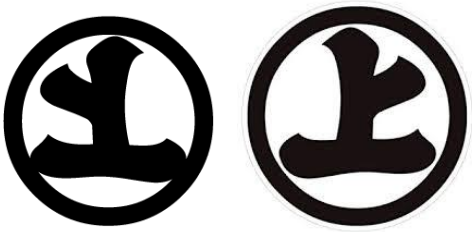
②文化文政年間に三山へ行った人数
文化・文政・天保1804～1844　40年間　124名　元禄～慶應178年間38832人

5）手水舎

①手水石の紋　丸に「ひだり上文字」

②手水舎前　左の灯籠寄進者　品野丹後の守

右の灯籠　御神楽講中



6）拝殿前

①天水桶も三山参拝記念を奉納（奉納碑紹介）

②「綱清のルーツ」の綱清とはだ～れ？

戦国期に房総（主に総州）を拠点に活躍していた武士、父は国清

ルーツ：総州村上氏の出自は信濃国の豪族で、2 度に渡って甲斐の武田信玄の侵攻を防いだことでも著名な戦国大名の村上義清と同族氏族だとされ、清和源氏村上氏流の流れを汲むとされている。総州村上氏の起源は古く、鎌倉時代の 1247 年（宝治元年）に起きた宝治合戦の頃だとされ、足利氏が上総守護代の任に命じられた際に、被官であった村上氏も一部の氏族を伴って総州の地に移住してきたのではないかと考えられる。南北朝時代になると上総国守護代に村上氏の名が出てくる。そして、足利氏衰退後は総州の有力氏族であった千葉氏の配下に組み込まれたと考えられている。

村上国綱・村上綱清親子は下総国の臼井荘にあった米本城一帯（現在の千葉県八千代市）を治め、善政を敷いたことから領民に慕われたといわれている。

7）諏訪台古墳群の一画

右手は諏訪台 10 号古墳、度親睦

左手三山供養塚　諏訪台 9 号古墳

・諏訪台古墳群とは

国分寺台地区の南西端に位置する大規模な古墳群です。弥生時代中期の方形周溝墓から古代の墓にいたるまで墓の築かれ続けた遺跡で、古墳時代の墳墓は 170 基あります。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての円形あるいは前方後方形の墳墓は台地の先端ちかくに分布する傾向があるようです。景観が美しい高台、桜の名所です